

「当事者性を表出するとは—Auto ethnography の観点から」

山田瑞紀 (Mizuki Yamada)

早稲田文化館 日本語科

当事者性を表出すること

本来、当事者性とは、該当の出来事を体験したこと、あるいはある属性の人物である（属性を持った状態）こと、言い換えれば他者からそのように見なされることを指す。だが本発表では、この定義に当事者の主体性を反映し、当事者が「自分は当事者である」という認識を持っていることとする。このような認識は、最初から本人に備わっているのではなく、ある当事者としての自己の物語を語りそして聴かれ、自己に獲得されていくものである。当事者とは、最初から当事者という本質があるのではなく、当事者になる過程を経てなっていくものなのである。当事者性を持つことは、ある観点に沿って出来事を眺めることでそのような現象として出来事を切り取ることである¹。

Auto ethnography（以下では、AE）は、そのような当事者になっていく、当事者という認識を獲得していく過程を過去の体験を通して自己物語を記述していくのに適した方法である。その際、問題になるのはその物語が真実であるか、資料として十分に足るのかという点であるが、重要なのは、その物語ごとの関連であり意味づけである。つまり、その物語の読者なり聞き手が、そのような背景があるならば、この過程は十分に理解可能だという説得性にある。

本発表において、当事者性を表す意味は、人がある出来事を捉える際には、何らかの立場に立って、言い換えれば、ある立場を前提にして出来事を捉えていることの指摘である。すなわち、真に「中立的」あるいは「客観的」に出来事を捉えることは困難でないかと疑問視するためにある。

多元的一性との関連性

当事者性が、本ワークショップのタイトルのキーワードである「多元的一性」に関連する点は、その名の通り、ある体験を有する自己の観点を指し示すことで、その観点によって既存の知のあり方を見直す点にある。

なぜそのような自己の観点が既存の知を見直すような動機になるかといえば、既存の知の枠組みにおいては、偏見を持たれ、理解されてしまいそうな出来事（事象）やその出来事を体験した人物（当事者）の現状がどのような知によって形作られているかを思い浮かべてみればよい。多くは専門家による「中立的な」（言い換えれば、観点の見えない）知の枠組みで調査対象として説明されているのではなからうか。もちろん2000年に入って、徐々に当事者の声に対する着目や配慮が散在するようになってきたが、部分的な、あるいは特有の個人の声ではないだろうか。無論、AEによる表出も特定の個人の声にすぎないと思

われるかもしれない。だが、AEはその当時の自己の観点を遡りながら「なぜ現在の自分がこのようにあるのか」という過去の体験談を再帰的、回顧的に語っていくことで、現在に至るまでの過程や経過を示し、その自明性に疑問視を投げかける。それは現代社会において未だ烙印を押されやすい出来事や人物を解きほぐしていく上で重要な示唆を与えてくれる。

さらにAEでは、過去の自己の体験が物語調で語られることで、聞き手による理解、共感を期待すると共に、そのような語り口が、論理的なそれとは馴染みにくい悩みや不安という混沌とした強い感情を表現することを可能にする。

i よく言われるように、妻、夫間の争いを対等な夫婦同士が揉めている「夫婦げんか」と見るのか「妻から夫への暴力」あるいは「夫から妻への暴力」つまり不均衡な関係の元に起きた「DV、Domestic violence」とみるのか。

参考文献

Elis, C & Bochner, A P., "Autoethnography, Personal Narrative, Reflexivity: Research as Subject," N.K. Denzin, & Y.S. Lincoln, eds., *The Handbook of Qualitative Research* (2nd ed), (Sage Publication, 2000), (藤原顕訳「自己エスノグラフィー・個人的語り・再帰性: 研究対象としての研究者」平山満義監訳『質的研究ハンドブック 3— 質的研究資料の収集と解釈』(北大路書店, 2006) pp.129-164.

中西正司・上野千鶴子『当事者主権』岩波書店
松田博幸「性の多様性とソーシャルワーク—性をめぐるオートエスノグラフィー」『ソーシャルワーク研究』42巻2号(2016)pp. 46-53.